

蛙神事の源流（１）

井 本 英 一

諏訪大社上社の元日の蛙狩かわずかり之神事で供えられる２匹の蛙は古い神で、社に祭られる祭神の他我であった。祭神が年末になって活力が衰えたとき、祭神の他我があの世からやって来て祭神に神饌として食べられ、祭神に新しい力を与えた。同時に祭りに参加した人間も、直会に際して祭神の他我である蛙をいただき、自然の法である神と同調して新しい出発をした。これが諏訪の古い神人共食の姿であった。

伊勢の二見浦から沖の夫婦岩を望む場所にある岩場の上にいくつもの蛙の焼き物が供えてある。参拝者は近くのお土産店で蛙を買い求めてこれを奉納して帰る。蛙を供える古い意味は何であったのか。蛙は夫婦岩に対するお供えなのか。夫婦岩の間に日の出が拝める時期に蛙を供えるのか。参拝者は海の方を向いて蛙を捧げるので、夫婦岩と蛙の岩場を一体とする考えに終わる恐れがある。そうではあるまい。夫婦岩の２つと蛙岩の１つは３つの岩で、それは内宮と外宮と一体となり全体を構成する。

諏訪大社上社は上社前宮まえみやと上社本宮ほんぐうから成る。上社境内には御沓石おくつ、蛙石、御硯石おすずりの３つがある。御硯石は諏訪明神が降臨した巨岩で、上部が凹んでいて常時水を湛えている。御沓石は明神の乗った馬の蹄の跡がある石である。

キーワード：

前宮の4隅には4本の御柱^{おんはしら}が立つ。本宮には本殿にあたるものはないが、広い間隔をあけて4本の御柱が立つ（三輪磐根『諏訪大社』学生社、1978年、29-30頁、72-5頁）。上社にある御沓石（馬蹄石）と御硯石は寺院の仏足石と同じもので、1対の凹みのある石である。蛙石（墓石）は蛙形を供える祭壇である。3つの石は位置がばらばらになった観があるが、前者2つの石は入り口に置く手形や馬蹄あるいは沓、草履と同じような境界の表象である。蛙石は蛙を供える祭壇であった。二見浦の夫婦岩は御沓石と御硯石に対応し、蛙形を載せる岩は蛙石に相当する。内宮と外宮の本殿の床下には心御柱^{しんのみはしら}がそれぞれ1本立っている。諏訪大社上社の場合は前宮と本宮にはそれぞれ4本の巨大な柱が立つ。二見浦の蛙形は古くは神宮参拝者が神宮に奉納したもので、夫婦岩に対して献げたものではないと考えられる。

欧州の巡礼者が目的の巡礼地に奉献する蛙の絵馬も同じ精神にもとづくもので、巡礼者個人々々の祖先動物、祖先霊を集団の祖先霊の前に集合させたのである。この行為によって巡礼者は、冥界としての目的地で心身に新しい活力を取り入れ黄泉^{よみ}歸りをしたのである。寺社の広場、川原、海岸の空地は祖先霊が大挙して集合した。祖先霊は一方では八百万^{やおよろず}の神々として川原に集合した。祖先霊は川原や海岸その他の広場に組まれた櫓^{やぐら}の周囲に集合した。イスラム教の聖地であるアラビアのメッカにあるカアバ神殿は、前イスラム時代には360のアラブの部族が年末になると祖先像をもって神殿に参拝し、新しい像と取り替えて帰っていった。この行為によって神殿に祭られるアラブの集団を代表する神は活力を手に入れたのである。偶像崇拜を禁じた一神教のイスラムの時代に入ると、人びとは偶像は持参しなくなったが帰りにメッカの土を焼いてつくった5センチ×3センチ×1センチのしるしを入手する。このしるしを礼拝用カーペットの前方に置き、跪座してメッカを遥拝するとき額にあてるようにする。

新年と柱と蛙の複合は欧州にも残っている。メイ・デイは北欧の新年の名残りである。4月30日の夜からメイ・デイに入ったが、この夜はワルブルギスの夜といわれ、ハルツ山脈のブロッケン山で魔女の供宴がある。この供宴

でのご馳走が蛙である。魔女は山の神あるいは大地母神のなれのはてである（大和岩雄『魔女はなぜ人を喰うか』大和書房、1996年）。蛙は山の神、大地母神の他我で、新年に際して神がみを活気づけるために神がみのもとに現れ神がみと人びとに食べられたのである。

５月１日のメイ・デイには五月柱が立てられる。高さは７－８メートルのものもあり、生ま木を伐り出す。大枝を払い、頂上に緑を残す。柱は広場に立てた場合、７－８年あるいは10年そのままにしておき、毎年５月１日が巡ってくると人びとはそこで祭りを行う。五月柱の頂上からいろいろの色の布テープが何十本と垂れ下っており、子供や娘が１人ひとりそれを手に取って柱の回りを巡る。テープが巻き付いた柱は蛇に見立てられる。欧州のケルト民族の新年であったメイ・デイの行事は、日本の諏訪大社や伊勢神宮と同じ構造をしている。

メイ・デイの前夜祭であるワルプルギスの魔女の供宴では蛙が第１のご馳走になる。魔女はブロッケン山の山の神のなれのはてで、山の神は自らの再生のために祖先霊である蛙を食べた。諏訪の始原の祭神も神体山の山の神であったと考えられる。上社本宮の社叢である神体山に自然の磐座である苔むした蛙石がある。禁足地であるので立ち入ることはできないが、地上に出ている部分は長さ２メートル、高さ１メートルは十分にあるという。御硯石も神体山の中にあるが渡り廊下（布橋）から拝むことができる。苔むした磐座の凹みには常に水が溜まっていて旱魃の神である。御沓石は本宮の場合、一の御柱の元にあるので万人の目につく。本宮は社殿を持たない神社であるので、太古は御沓石のある場所も神体山に属したであろう。

諏訪大社上社の前宮と本宮、下社の秋宮と春宮の４宮にはそれぞれ４本の御柱が立っているので、合計16本の御柱がある。柱は寅歳と申歳に立て替えられる。つまり７年ごとに立て替えるのである。平成16年は申歳である。16本の御柱のうち、本宮の一の御柱が代表である。５丈５尺の御柱の頭部が三角錐状に切り落とされ、そこに御幣がとりつけられる（三輪磐根、前掲書、151-2頁他）。五月柱の頭部には緑が残され、そこから多くの色布が垂れ下が

る。諏訪の御柱も五月柱も、巨大な削りかけでアイヌのイナウも同類である。蛙を食べる行事が山の神の再生のためにあった。諏訪大社の各宮の4本の御柱の意味は今のところ私には説明できない。

中国には幡や旛や幢の文字がある。^{ハツ}番は白川静『字統』によると、動物の爪（采）の部分と掌の部分（田）とからなり、うすくてひらひらするものの意である。巾は布である。方は横にわたした木に人を懸けた形象で、境界に立てて呪禁とする。神が降臨する聖所にこれを立てる（706頁，783頁）。布がなかった最初期には動物の毛皮が用いられた。動物はそれぞれの部族の祖先獣であったので、毛皮は特定されていた。部族間の通婚の結果、多種の祖先獣を奉ずるようにもなった。聖所に2本の柱を立てその天辺に横木をわたし、祖先神を表象する神人を殺して懸けた。神人は神官、良家の子弟、奴隷、捕虜、囚人がこれを務めた。神人は季節の変わり目に新しい力を子孫である部族民にもたらすと信じられた。古い段階では祖先を表象する人間神としての神人は祖先獣の姿をとった。古代エジプトでは、各州の旗印は竿の先端にとりつけた板の上に祖先獣を載せたものであった。祖先獣の実物あるいは模型は早い時期にその動物の毛皮に変わったと考えられる。

聖地あるいは先祖代々の墓の傍に立てた柱の頂上から布を垂らした^{のぼり はん}幟や幡は、墓中の祖先獣の標識である。旛の場合は、2本の柱が用いられる。柱は天梯で、片方は上りの、他方は下りの梯子である。両方の柱の間にわたされた横木に懸けられた祖先獣の形象化したものが旛であった。動物の毛皮は頭、4本の脚、尾が付いているが、頭部を棒の天辺に結えて垂らすと、もっとも目に入るのは揺れる脚部である。幡は何種類かの色布を垂らした幟である。それぞれの色の布は異なった祖先獣の毛皮から発展したものであろう。幢は筒形の布を棒の天辺から垂らした幟である。筒形の布は、犠牲獣や人間の内臓と骨を剔出したあと、干れ草や藁を詰め込んだものに由来すると思う。このようにしてできた筒形の皮を棒の天辺から下げたのである。

五月柱の先端から垂らした何十本もの色とりどりの布テープの背景には古代の祖先獣の毛皮があったと思う。伊勢の内宮と外宮の本殿の床下に立てら

れる心御柱も多くの異なった色布を垂らしている。本来は塚から棒を伝って出現する蛇のような祖先神（祖先獣）を表わしたものである。諏訪大社の上社本宮一の柱の頂上には御幣を立てる。御幣は純白の和紙でつくられ、長く下まで垂れてはいないが、古くは祖先獣の皮であった。白川、前掲書によると、幣は神に供える幣帛に限らず、玉、馬、皮革の類もいった（764頁）。天照大神は女神であるが、もとは男神であったという松村武雄の説がある。祭る者が祭られる者になるという命題によると、男神であった天照大神を祭る巫女が信者から祭られるようになり神格化したというのである。同じような構造をもつワルプルギスの夜の魔女は山の神のなれのはてであることは断定しうるので、天照大神はやはり女神であった。日本神話によると、天照大神が忌服殿で機織りをしていたとき、スサノヲノミコトが天の斑駒^{ふちこま}を逆剥ぎ^{さか}にした毛皮を屋根に穴を開け下にいる大神に投げつけたので、大神は驚いて梭^ひで身を突き死んだ。天照大神の冬至における死と再生の儀礼では、大神の織る布、馬、皮が表われる。死にゆく大神はこれらの供物を自身の他我に供え、再生するのである。

二見浦の蛙は夫婦岩に供えるのではなく大神の再生の際に出現する大神の他我そのものであった。蛙は鮭やボラやウナギのように海水と淡水両方で生きることはいできない。本来は五十鈴川に属するもので、荒木田氏によって死と再生の儀礼に用いられていたのかも知れない。あるいは、神宮祭祀が大和の地で行われた時代から蛙の神事があったのかも知れない。恐らく後者であろう。諏訪大社は大国主神を祭る出雲大社の系統の神社で、全国に1万社以上の分社をもつ国つ神系の神社である。大国主神は『旧約聖書』「創世記」にあるヨセフに相当する神話の主人公である。伊勢神宮内宮の祭神は天孫ニニギノミコトを送り出した天照大神で、大神は「創世記」のアブラハムに、その孫ヤコブはニニギノミコトに対応する。この2つの神話の対比についてはかつて論じたことがあるので省略する。ヤコブ神話とヨセフ神話はそれぞれ朝鮮を通して北部九州と出雲に入ってきた。蛙を祖先神とする思想は本土着のものではなかった。

古代エジプトのヘルモポリスの神々のうち蛙の頭をもつ女神にヘクトがいた。ヘクト女神は両手にクルクス・アンサータ（アンク）を握り、生命の付与者としての職能を表わしていた。ヘクトは出産の女神でもあり、死者の再生を助けた。棺の上にこの女神の像が描かれた。蛙はキリスト教時代でもランプの油壺に用いられたが、エジプトでは素焼きの小さなランプの上に描かれた。このランプは室内祭壇用の供物とされた。蛙と蛇は深淵から出現する生命の神と考えられた。一方、ヘルモポリスの古い伝承では、8神のうち男性の4神は蛙の頭をつけ、女性の4神は蛇（あるいは男根）の頭をつける。その理由は、蛙は最古の動物に属し3億年前に地上に現れたが、蛇はせいぜい2億年の歴史しか持たないからである（S.ロッシニ、R.シュマン＝アンテルム『エジプトの神々事典』矢島文夫・吉田春美訳、河出書房新社、1997年、66-7、203-4頁、V.イオンズ『エジプト神話』酒井傳六訳、青土社、1988年、60-1、206頁）。

古いエジプト芸術では男神の頭が蛙になっており、女性のそれは蛇になっている。ロッシニの解釈では蛙と蛇の地上に出現した年数によって男神、女神の別の由来とするが、エジプト人がそんなことを考えた筈はない。ユング派の精神分析がいうように無意識の女性的たましいである蛙が男神の頭に付き、男性的たましいである蛇（男根）が女神の頭に付いたのであろう。蛙は女性的アニマで蛇は男性的アニムスであった。この無意識の表象は早くから反転して蛙は女神になったが、これが普通の意識であった。メイ・デイ前夜の魔女を再生させる蛙、天照大神と蛙、諏訪の神体山の山の神と蛙はこの段階のものである。エジプトの棺の上に蛙が描かれる。棺の内部の底にも女神像が描かれているが、ヘクト以外の女神である。蛙神と蛇神は男女性を象徴する神として崇拝された。諏訪大社の蛙とミシャグチ神事の藁でつくった蛇は1対のものとして崇拝された。蛙を蛇の餌食にしたというものではなさそうである。男性原理である蛇（男根）は死を象徴し、女性原理である蛙は再生の象徴である。天照大神にはスサノヲノミコトが大神の死と再生の儀礼に関与する。スサノヲは天上から地上に追放される。地上は天上から見ると

冥界に当たるが、ここで八岐大蛇を殺すことによってそのエネルギーを大神に移し、大神の再生は完結する。大神は冬至の儀礼で蛙の供物を食べ、自らのアニマを更新し、自らのアニムスであるスサノヲに大蛇を殺させてアニムスを更新する。

東京都千代田区大手町に平将門の首塚がある。古くは神田明神の社地があった。現在の神田明神は外神田に移転し、将門は相殿^{あいどの}に祭られて目にすることはできない。首塚には数匹の子蛙を背に乗せた大きな親蛙の焼き物が数体、塚の周りに安置してある。将門の霊は怨霊であるので、これを鎮めて再生させるために蛙を安置したのであるうか。将門は逆賊であるが、その靈魂は願いを叶えることができなかったので烈しい怨念をもち、御霊信仰の対象となった。神田は字義どおり神領の田のことで、伊勢神宮の御田^{み た}という由緒のある土地である。多町（田町）、美土代町^{み と し ろ}も関連地名である。神田からとれた米は神に捧げる聖米で庶民は口にしない（丹羽基二「神田神社」『日本の神々』11、白水社、1984年、101-6頁）。神社の境内では鶏が放し飼いされるが、水田には田鶏^{でんけい}がいた。田鶏とは蛙のことで、肉の味が似ていることから中国ではそう呼ばれた。神田明神の祭神はオオナムチノ命つまり大国主命と少彦名命である。大国主命は男性の地父神で、蛙は本来この地神のアニマであった。神田明神の出自は出雲系で、それは諏訪大社と同じである。平将門が討たれた（940年）以前から神田明神は祭られているので、大国主命あるいは神田の地神であった蛙は将門よりも古い。将門の首塚が神田明神に取り込まれるようになり、首塚に蛙が祭られるようになったのかも知れない。

祭神が蛙（大ガマ）で大蛇を殺すことによって神が再生する神事がある。備前児嶋郡日比の八幡神の祭神は大ガマであるという。この社の前面の海中にある大槌島に大蛇が棲み、ガマを呑み込もうとして海を隔てて相争った。かねて弓の達者な神官が強弓を射て大蛇を倒しこれを祭ったという。その蛇の鱗と称するものが今に八幡社にあるという（中山太郎『日本民俗学辞典』名著普及会、1980 1941 年、480頁）。中山はこの出典を大正7年（1918）7月26日付の『岡山新報』とする。この八幡社には大蛇と大ガマが祭られ、

主神は大ガマで、大蛇は毎年の祭りで矢で射られたと考えられる。諏訪大社の元旦の蛙狩之神事では、毎年2匹の蛙が小矢で刺されて殺され、先住の山の神がその活力を取り入れて再生する。ミシャグチ神事で土穴の中に大祝とおおほふりと藁の蛇が入るが、こちらは蛇が殺されることはない。蛙が蛇の餌にされることもない（中村貞里『日本動物民俗誌』海鳴社、1987年、132-3頁）。

平将門は平貞盛と藤原秀郷によって討伐される。秀郷はのちにたわらのとうた倭藤太として勢多の唐橋の下に棲む竜神の請いをいれて三上山のムカデを強弓で退治した。将門の首塚と蛙、秀郷と竜神、備前日比の八幡社の大ガマと大蛇、諏訪大社の蛙とミシャグチ神などの説話では、神の死と再生の祭りで蛙あるいは蛇は弓矢で殺される。古代エジプトでは蛙頭の神と蛇頭の神が男神・女神の夫婦神とされた。子孫を残すために男性原理が死に、その再生した子孫が女性原理によって再生産されたのである。儀礼では弓矢で男性原理の祖先が殺され、その霊が女性原理によって子孫に伝えられた。蛙と蛇が対立した概念として出る場合、必ずしも蛙が女性原理として考えられるとは限らなかったようである。

蛙を神と見る習俗は広く浙江、江蘇、広東に広がっている。江西の宜黄には將軍しょうか蕭何の廟があり、神格化されたこの將軍はよく蛙の姿で現れた。蕭何は江蘇の沛はい県の出身で、同じ沛の出身である漢の高祖の功臣である（W.エバーハルト『古代中国の古代文化』白鳥芳郎監訳、六興出版、1987年、181頁）。『漢書』高帝紀第一（上巻、小竹武夫訳、筑摩書房、1977年）にいう。高祖の母がある日、大沢の堤で休んでいるうちに夢を見て神に出遇った。そのとき雷鳴があり父が行って見ると妻の上に蛟（角のない竜）がいた。彼女はやがて妊娠して高祖を生んだ。高祖は若いとき、宿駅の長をしていたが、酔い潰れて地面に倒れると、その体の上に竜が乗っていた。あるとき高祖は酒に酔って道を進むと大蛇が横たわっていた。高祖は大蛇を真つ二つに斬りその間を通して行った。斬られた大蛇の傍で老婆が号泣していった。自分の子は白帝の子で蛇に化身して道に横たわっていたが赤帝の子に斬られた、と（3-5頁）。

『ブルターク英雄伝』の「アレクサンダー」には、アレクサンダーの母が就寝するといつも蛇が腹の上におり、そのため夫が近づかなかった。しかし母オリュンピアスは妊娠してアレクサンダーを生んだとある。高祖も同じように竜神の子と考えられた。高祖は神界からエネルギーを運んできた蛇を二つに斬ってその間を通り活力を身につけた。ヘブライの伝承はいう。アブラム（99歳になったとき、神との契約でアブラハムと名乗るようになる「創世記」17.5）は、牝牛と牝山羊と牝羊と山鳩と鳩の雛を神の前に連れてゆき、牛と山羊と羊を真つ二つに斬り裂いて向かい合わせて置き鳥は斬り裂かなかった。夜になると、煙を吐く炉と燃える松明が2つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。その日、主はアブラムに、ユーフラテスからナイルに至る土地を汝の子孫に与えるといった（「創世記」15.9以下、17以下）。牛、山羊、羊、鳩は当時のヘブライ人の祖先獣と考えられる。アブラムはこれらの祖先からエネルギーをもらい、神と契約した。赤帝と白帝の違いはあるが、赤蛇の子孫である高祖は2つに裂かれた白蛇の間を通して、将来帝王になる力を身につけたのである。蕭何はこの時代、高祖より身分は上であったが高祖の創業を援けて肅正されることなく終身功臣として尽くす。高祖廟には蕭何社が守護神としてあるが、この守護神は蛙である。蛙が蛇の餌食にされることもない。諏訪大社の蛙神と御左口神（蛇神）の場合、元旦に殺されるのは2匹の蛙である。蛇神ミシャグチは大祝に土の穴の中で活力を伝えたのであろう。神事のあと藁蛇は処分された。東京大手町の将門の首塚の蛙像は江戸城の守護神とされた。

古代中国の夏の桀王を討ち、殷の湯王に創業を成さしめた名相伊尹の誕生にはまず蛙の誕生があった。出石誠彦「殷初史伝の批評」1941年（『支那神話伝説の研究』中央公論社、1943年所収）は『呂氏春秋』や『楚辞』天問とそれに関する王逸の注から伊尹誕生の古代伝説を論じている。伊尹の母が妊娠したとき夢の中で神女が母に告げていった。臼とかまどの中に蛙が生まれるので、速かに去って後ろを振り返ってはいけない、と。しばらくすると臼とかまどの中に蛙が生まれた。母は家を出て東に逃げたが、途中で自分の村

を振り返ったので辺り一面が大洪水になった。母はこのために溺死し、空洞のある桑の木に化生した。洪水が引いたあと、赤ん坊が水辺の空桑の中で泣いていた。ある人が赤ん坊を取り上げて育てた。子どもは長じて特殊な才能を発揮した。有莘国は伊尹が木の中から生まれたことを憎み、湯王に送る女に同伴させた（729頁）。

ここでは宰相伊尹は蛙としてかまどの中で生まれている。日本の民俗で炉辺で出産する事例は数多くある。冬の出産においてはそれは理解し易いが、真夏においても炉の火を熾して出産する。伊尹の伝説では臼とかまどの中に蛙が生まれるモチーフが使われている。木臼であれ石臼であれ、それはへそ石と考えられそこから赤ん坊が誕生するとされた。その空洞はこの世とあの世の境界の穴であった。エバーハルト、前掲書によると、孔子は空ろな桑の木すなわち空桑の中で生まれたとされる。これは孔子の殷王朝とのつながりや伊尹伝説の影響によるものである。空桑は立っている木ではなく、地面に倒れて臼の役をしていたものから起ったのであろう（184頁）。

唐時代の文人殷成式の『酉陽雜俎』（2、今村与志雄訳注、東洋文庫、1980年）によると、かまどがいわれなくひとりでに湿っているのは^{こうちゅう}鈎注という赤いヒキガエルが棲みついているからである。いなくなればその現象は止むという（216頁）。古代の出産に限らず半世紀前までの出産では、赤ん坊を油紙の上に敷いた砂と木灰の上に生み落としたものである。これで母胎から出る羊水や汚物が処理された。『酉陽雜俎』の伝承では、蛙はもう新生児ではないし灰が湿る理由も明らかでない。蛙がいなくなれば灰の湿り気もなくなると伝えられるが、その理由も明らかにされない。全て出産、蛙、新生児、灰、羊水がその背後にある。日本には出産が玄関の土間で行われたことがあった。玄関は内と外の境界であるからそのように説明できるであろう。もう1つ忘れられないことがある。葬式の出棺のさい玄関の敷居の所でおがらで火を燃やす。盆の迎え火と送り火も入り口で燃やす。婚礼のさい、花嫁は花婿の家の入り口の敷居の上で焚いた火の上を渡る。日本に限らずこの習慣は広く見られた。玄関の敷居の下に幼児の遺体を埋葬する事例は近年まであっ

た。かまどや炉の下に祖先を埋葬した事例は民話や昔話に見られる。

古代エジプトのファラオは、ヘブライの民が400年にわたる奴隷生活から解放されてエジプトの地を去る許可を与えなかった。主はモーセとその兄アロンに命じてナイル川の蛙に王宮と寝室を襲わさせ、民の家のかまどやこね鉢にも入り込ませた（『旧約聖書』「出エジプト記」7・27-9）。エジプトの場合、蛙がかまどの火を消して民の生活が損われることになる。ヘブライ人、エジプト人双方に蛙がかまどやこね鉢の中にいるという伝承があり、蛙は王宮（神殿）や王の寝台で祖先神として守護神の役割りを果たすという伝承があったことが分かる。エジプト人には蛙頭のケヘト女神が豊穡の神として生きていた時代のことである。中国には炉やかまどに蛙が出現すると洪水になるという伝承があったことは前述した。エジプトも毎年の大洪水で蛙の大発生の年があったのがこの伝承の背景にある。

朝鮮の百済の最後の王であった義慈王は即位してからは国政をないがしろにしたためさまざまな怪異が生じた。亡国1年前（659年）、扶余の川である泗泚川の岸に大魚が出て死んだ。その長さは3尺に達し、それを食べた者はみな死んだ。亡国の年、王都の井水が血の色に変わり、西海のほとりに小さい魚が出て死に食べきれないほどであった。泗泚川が血の色になり、数万匹の蛙が木の上に群がった。王都の人は驚いて逃げ出し、つまずき倒れて死んだ者も百余名にのぼった。1人の鬼が宮中に入ってきて大声で、百済は亡びる、百済は亡びると大声で叫びすぐに地の中に入ってしまった。王がその地を掘らせてみると、深さ3尺の所から亀が1匹現れた。その背中に文字が書いてあり、百済円月輪、新羅如新月とあった（一然『三国遺事』金思燁訳、朝日新聞社、1976年、112-3頁）。百済は満月のようにこれから欠けてゆき、新羅は新月のようにこれから大きくなる、という意味である。

モーセはファラオの所へゆき、主の意を体して手にした杖でナイル川の水を打つと、水は血に変わり魚は死に、川は悪臭を放ち水を飲むことができなかった。エジプト人はナイル川の周りを掘った。ナイルの水が飲めなくなったからである。その1週間あと、ナイル川に蛙が大発生し王宮に侵入し、かま

ど、こね鉢にも入り込んだ。ファラオはモーセとアロンを呼んで、汝らの主に蛙がナイル川以外に残らなくなるようお願いしてくれと頼んだ。翌日、蛙は家、庭、畑から死に絶え、積み上げた死骸の山から発する悪臭が国中に満ちた（「出エジプト記」7.17-8.11）。

百済の義慈王とファラオの治世のできごとには共通の原型があったと考えられる。蛙は他の聖なる物と同じように両義性をもっていたので、穢れとしても示顕し聖性としても示顕した。王の治世の折り目に模擬闘争の儀礼があった。模擬ではなく現実の闘争が行われ王朝が交替することもあった。日本の正月の行事である射礼、相撲、羽根つき、双六、凧揚げ、かるた（百人一首、花札）などの勝負ごとは、季節の変わり目の代表である正月の闘争儀礼である。百済では数万匹の蛙が群がった。人びとは驚き逃れるときつまずき倒れて多数が死んだ。『今昔物語集』巻第28、第41に、近衛の御門の内に夕暮になると大きなガマが1匹現れて平たい石のようになり、通りがかった人はつまずかない者はいない、とある。近衛門の石は敷居の場所にある祭壇で、古くはそこに祖先である獣が供えられたと考えられる。人びとは蛙が供えられた祭壇の前にひれ伏した記憶があり、それが石につまずくと伝えられたのであろう。百済の伝承では、樹上に群がった蛙から逃れる人びとがつまずいて百人余りの者が倒れて死んだ。恐らく古代の儀礼の一端がこのような伝説になったのであろう。祭壇の前にひれ伏す儀礼は、仏教の五体投地の中に見られ、現に東大寺二月堂の修二会やチベット巡礼者が実修している。この習俗は五体を大地に接触させることにより、体内にある古い気を大地に放出し、身体を空にして新しいエネルギーを摂取する儀礼だと思う。このことは別の個所で論じた。

百済の伝承を見てもエジプトのそれを見ても、無数の蛙が湧いて一面に血が溢れる。このあと積み上げられた蛙の死骸から悪臭が漂う。蛙の大量発生は自然の生殖の摂理に依るものであろうが、蛙を祖先あるいは神と見なした時代、神を殺して祖先の力を身につけようとしたと考えられる。エジプト、朝鮮、日本の古代の習俗では蛙は祖先神であった。祖先神を殺したあとの死

骸はごみ同然に廃棄された。このため環境が悪臭で汚染されたのであろう。寺島良安『和漢三才図会』（7, 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注, 東洋文庫, 1987年）巻第五十四 湿生類の条にいう。ガマの種類は多い。ガマが合戦するのは不吉であるとされる。『続日本記』称徳天皇神護景雲2年（768）7月, 肥後の^{やつしろ}八代郡でガマが広さ7丈ばかりに並び列なって南に向かい, 日暮れになってどこかに消えた。桓武天皇延暦3年（784）5月, ガマ2万ばかりが摂州難波から南にゆき池に列なること3町ばかり, 四天王寺の内に入って悉く消え去った。『古今著聞集』魚虫禽獸第三十に依ると, 後堀河天皇寛喜3年（1231）, 高陽院殿の南にある堀でガマ数千が群れをなし左右に構え合って戦いあるいは咬殺し, 半死になるものがありそれが数日つづいた。京師の人は争ってこれを見物した（392-3頁）。

無数に湧く蛙について, 古代の人びとは大挙してこの世を訪れる祖先霊を見たであろう。自分の父母, 祖父母, 曾祖父母と代を重ねてゆくと, 10代前までの祖先の総和はまだしも, 20代前までの祖先の総和は数え切れない数になるのを知っていた。祖先が大挙して移動する現象の中に何らかの予兆を見た。祖先の群れが2つに分かれ闘争するのは, 通過儀礼での真正のあるいは模擬の儀礼と見た。根岸鎮衛『耳袋』（2, 鈴木棠三編注, 東洋文庫, 1972年）にいう。番町法眼坂で折ふし蛙の合戦があるという近隣の者が見物に出かけるということである。あるとき小笠原氏（鈴木注, 市谷御門内に屋敷があった小笠原久庄衛か）がこれを聞きいうには, 小笠原氏など住まいする辺りは殊のほか蛙が多く, 屋敷ごとに炭俵の古いのに取り入れて, 夜分下僕が法眼坂辺りに捨てるので, おのずから蛙の数が多くなり, 中には死んだ蛙もあるので, きこの蛙の合戦があったといいふらした, ということであった（巻の八, 175-6頁）。蛙の合戦がどのようなものであったのかよく分からないが, 近隣の者が見物に出かけたとあるので, ただの群れではなさそうである。前引の『古今著聞集』の記録の方が真に迫っている。江戸時代の合理主義は蛙を祖先とは見なくなったのであろう。

蛙は他の生き物と闘争する。こちらの方がトーテムの闘争として捉え易い。

蛙報思譚では蛙が蛇を殺す。前出、中村禎里『日本動物民俗誌』によると、ヒキガエルまたはトノサマガエルが蛇を呑み込んでいる状況を岸上鎌吉(1889)、戸木田菊次(1962)、岡田弥一郎(1974)が報告している。また古浄瑠璃の『信太妻』(1674)では、狐女房の子である安倍晴明は2羽の鳥の会話を聞き、帝の病いの原因が御殿の丑寅の柱の礎の下で蛇と蛙が闘いその憤りが上気したためであると知り、出世の糸口をつかんだ(132-5頁)。『廣文庫』第五冊、477頁の「蝦蟇、蛇と闘ふ」に引く『百鍊抄』には治承4年(1180)3月16日、海橋立の池でガマと蛇が合戦し、ガマが蛇を食い殺した。見物人が人垣をつくった。賀茂上社でも同じことがあった、とある。『安政見聞録』には下總相馬郡大留の里での1丈4、5尺の巨蛇と1尺8、9寸のガマの闘争が記録されていて、最終的には巨蛇は死にガマは行方不明になった、とある。『唐書』五行志には先天2年(713)6月、京師朝堂の床レンガの下から長さ1丈余りの大蛇が出現した。そのとき、^{たらい}盤のようで目が火のように赤い大ガマが出てきて互いに闘ったが、急に蛇は巨樹の中に入りガマは草の中に入って見えなくなった、とある。

蛙は常識的には蛇の餌食になるとされ、諏訪大社の元日の蛙狩之神事に際して小矢で殺す2匹の蛙も御左口神祭りの祭神である蛇に与えるという説があるが、これらの例では蛙は蛇に食われないで反対に蛇を食う。恐らくは、祖先神である蛙と祖先神である蛇が子孫である人間に幸福をもたらす闘争儀礼が物語化したものであろう。『唐書』では大蛇が朝堂の床の塼の下から出てきたとある。塼はササン朝ペルシアのものは1辺29センチの正方形日干しレンガで宮殿、神殿、墓室に用いられる。中国の朝堂に用いられた塼は、正方形または長方形の焼成レンガであらう。塼のほかに同じ寸法に切った石製の磚がある。塼あるいは磚の1枚1枚は祭壇であった。祭壇の下から出てきた大蛇は王家の祖先の1人であった。この大蛇と^{たらい}盤のようなガマが闘った。ガマは『今昔物語集』に出る近衛門の内に現れる大ガマを想起させる。ガマは平たい石のようになり、通りがかった人は必ずつまずいた。平たい石は門の敷居の祭壇で、祭壇の下からガマが出現し人びとは平伏した。『唐書』の

大ガマは朝堂の敷居の下から出現したのである。盤の如しとあるが、盤は磐とも通ずるので、平たい大きい石のようなガマをいったともとれる。朝堂は皇帝のもっとも重要な施設で、そこは祖先の霊によって守護されていた。大蛇も大ガマも帝室の祖先霊で、帝室の繁栄を願って儀礼的な闘争を演じ、あの世に通じる巨樹の空洞や草むら（の穴）に入っていた。

蛙と蛇の闘争は、古代ギリシアの伝承ではホメロスに帰せられているが後代の偽作である「蛙鼠合戦」という諷刺詩の中にうたわれている。ペーレウスの子である蛙のピューシグナトスが鼠のプシーカルパクスを招き、背に乗せて自分の水中王国に案内していた。途中蛙は水蛇に驚き水中に潜ったために鼠は死んだ。これが原因で大戦争が生じ鼠に歩があったがアテーナーの要請でゼウスが中止させるべく雷霆を投じた。しかし効果なく蟹をつかわして鎮定した（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年、190頁「パトラコミュオマキアー」の項）。蛙はペーレウスと海の女神テティスとの子である。アキレス腱以外は不死身であるアキレウスも両者の子である。蛙は陸生の鼠を水中の宮殿に招待した。鼠は蛇に殺されてしまう。ギリシア文化では鼠（スミントス）は天帝ゼウスの子アポロンの他我で、アポロンを活性化させるために供犠された。アポロンの別名は鼠のアポロン（スミンティオス・アポロン）といった。

蛙鼠合戦は水神（蛙）と地神（蛇）と天神（鼠）の闘いなのである。先住民文化から受け継がれた女神アテーナーは蛙の肩をもってインド・ヨーロッパ系の太陽神ゼウスに執りなす。アテーナー女神と蛙は月の精であるが、太陽の精である鼠と戦うことによって世界を活性化させる神話にもとづいたものであろう。蛙は無骨、鼠は内骨、蛇は内骨、蟹と亀は外骨を代表する生き物である。蟹や蛇は殻や皮を脱いでつややかな身体に戻るので古来霊的な生き物とされた。ギリシア神話では仲裁者の蟹は水神として蛙の代弁者として、優勢な新来者である太陽神の他我であり穀霊である鼠を打ち負かす。アポロン神のエピセットは印欧語系のミューズ（鼠）を用いないで先ギリシア語のスミントス系の語を用いている。イントスで終わるラビュリントス（迷宮）、

コリントス(地名)のような単語は印欧語ではなく先ギリシア語に由来する。蛙鼠合戦のギリシア語の標題には印欧語のミューズが用いられているのでゼウスとアポローン父子の印欧語系をよく表わしている。テティスはペーレウスの前で水や火ばかりでなく各種の生き物に変身したので、ペーレウスは彼女が変身して人間の姿になったときそれを取り押さえて妻にした。蛙はテティスの他我であるが、テティスの変身の途路に出現する他我であった。『イソップ寓話集』(中務哲郎訳、岩波文庫、1999年)の「鼠と蛙」では、蛙が鼠を水中の自分の家に招待する。鼠が泳げないという蛙は鼠の足と自分の足を紐で結び水に潜って相手を溺死させる。鼠が死んで水面を漂っていると鳥が飛び降りてきて2匹とも食ってしまった(384話)とある。蛙鼠合戦に用いられたテーマの異形である。

ヘロドトス『歴史』にいう。スキュティアのいろいろな部族の王たちは連合して、ペルシアのダリウス大王に使者を送り、土産として小鳥、鼠、蛙、5本の矢を届けさせた。ペルシア人は使者に贈り物の意味を尋ねたが、使者は贈り物の意味はペルシア人自身が考えて欲しいといい残して帰っていった(4.131)。ヘロドトスはずづけていう。ペルシア軍の陣列とスキュティア軍の陣列の間に1匹の兎が飛び出し、スキュティア軍は戦列をみだし大声を挙げてこれを追い始めた(4.134)。小鳥と鼠は天空の太陽を象徴し、蛙と兎は月を象徴することは別稿で述べたが、5本の矢の解釈は保留したままにしておいた。5本の矢は古代エジプトから中国、日本において新年や季節の変わり目に行われた四方拝の際に東西南北の空と中天に射られた矢ではなかったかと思われる。この矢で東西南北と中心に現れる祖先霊を射てそのエネルギーを身につけた射礼が考えられる。スキュタイ人の諸王は自分たちは祖先霊を身につけることができるので、ペルシア軍には敗れることはないことをいおうとしたのである。結果としてダリウスのペルシア軍は撤退した。一方、5本の矢と蛙、鼠、鳥のトーテムは死者の再生に際して用意されるものであるので、ダリウスはスキュタイ人諸王の含意を秘密裏に悟ったのかも知れない。なお、イソップに出る鳥と鼠と蛙の話には太陽の象徴である鳥が鼠の死

と蛙の死を経て太陽の再生を促した古俗が見られる。

ギリシアの蛙鼠合戦と同型の異類合戦は日本にも見られる。お伽草子の「かくれ里」（島津久基編校『お伽草子』岩波文庫、1961年）にいう。ある人が仲秋の明月の夜、木幡の野辺にいくと、大きな穴の中で人の声がする。忍び込むと別天地が開け、鼠たちが立ち働いている。そこへ早馬が駆け込んできて次のような口上を述べる。^{にしのみや}西宮に棲む鼠が恵比寿殿のお供えを盗み食ったため、恵比寿と比叡山の大黒天の争いになった。恵比寿は竜宮城に下知して魚貝の軍十万余騎を集めた。大黒天は比叡山に集った鼠の軍が少ないのでかくれ里の鼠を召す、と。魚貝軍と鼠軍は互いに軍使を立てて降参を勧めるが鼠の軍使は猫に脅かされて逃げ帰る。ちょうどそのとき、唐から都見物に日本へやってきた布袋和尚が仲裁に入り両軍は和睦する。大黒と布袋が相撲をとり恵比寿が行司を勤め、その掛け声で目が覚めてみるとそれは一炊の夢であった（「隠れ里」『日本古典文学大辞典』第1巻、岩波書店、1983年、603-4頁、小島孝之）。

ギリシアの蛙鼠合戦では蛙が鼠を背に乗せてかくれ里である水中の宮殿に案内する。蛙は途中、水蛇を恐れ水に潜ってしまい鼠が蛇に食われる。お伽草子では鼠の軍使が猫に脅かされて逃亡する。魚貝軍は恵比寿のトーテムで蛙鼠合戦の蛙軍にあたる。アテーナー女神はフクロウをトーテムとする先ギリシア時代最大の女神であるが、山の神としてワルブルギスの夜の魔女や天照大神と同じように蛙を供物にした時代が古くはあったであろう。マリヤ・ギンブタス『古ヨーロッパの神々』（鶴岡真弓訳、言叢社、1989年）によると、古代の聖地への奉納物に蛙や亀があった。今日でもバヴァリア、オーストリア、ハンガリー、モラヴィア、ユーゴスラヴィアでは聖母マリアへの奉納物に木製のヒキガエルが残されている（176頁）。ネリー・ナウマン『山の神』（野村伸一・檜枝陽一郎訳、言叢社、1994年）は蛙の供犠に言及しないが比較文化史研究にとって必要な書物である。

ゼウス親子は天空神、太陽神であるので前述したように鼠を眷属・トーテムとした。大黒天は厨房の神で鼠の化身である。恵比寿は蛭子と同一視され、

多産と福の神として崇拜された。蛭は吸血虫であるが、ぬるぬるの体は蛙と同じであるので蛭子は蛙を意味したと考えられる。かくれ里の魚貝軍と鼠軍の合戦は、蛙鼠合戦の異形であろう。仲裁者はギリシアでは魚貝の蟹であり、「かくれ里」では弥勒の化身である布袋である。弥勒はイランのミトラク（ミトラク、ミスラク）の写音で不滅の太陽神、救世主を原義とする神格であった。ギリシアと日本の異類合戦で用いられたモチーフは類似したものが多い。「蛙鼠合戦」は古代にはホメロスに帰されたが、後代の偽作である。「かくれ里」は方広寺の大仏のことが見えるので、恐らく再建された慶長（1596 - 1615）以後の作品である（前掲「隠れ里」）。16世紀後半、西洋人によって持ち込まれた『イソップ寓話集』と共に諷刺詩である「蛙鼠合戦」も本邦に渡来したのではないだろうか。換骨奪胎して新しい文芸作品となるのに時間はかからなかった。

蛙鼠合戦や異類合戦ではないが、百合若大臣の物語がある。百合若大臣はむくり（蒙古）遠征の帰途、家臣別府兄弟に裏切られて玄海の孤島に置き去りにされるが、愛鷹緑丸の助けによって筑紫に帰還し別府兄弟を誅する。一方、ギリシアのホメロスの叙事詩『オデュッセイア』では、主人公のオデュッセウスはトロイ遠征の帰途、海神ポセイドンの怒りに触れて島に留められる。彼の妻ペネロペーは求婚者らに悩まされる。アテーナー女神はポセイドンに対してオデュッセウスを帰還させるよう取りなす。ゼウスは使者ヘルメスを島の女神に遣わして仲裁する。オデュッセウスは乞食の姿に身をやつし帰宅するが妻は気が付かない。乳母は客人の足を洗うが足の古傷から客人がオデュッセウスであることを知る。彼は乳母を制して黙らせる。求婚者らはペネロペーに結婚を強要する。彼女はオデュッセウスの強弓を試みるというが、誰も引きえなかった。乞食の姿をしたオデュッセウスも弓を請い引き絞って求婚者らを射殺する。

百合若大臣の蒙古からの帰還の物語とオデュッセウスのトロイからの帰還の物語の間には多くの類似点がある。百合若の北の方は別府兄に大臣は戦死したと偽りの報告を受ける。別府は北の方に求婚するが北の方は3年の猶予

を乞う。ペネロペーの時間延ばしと同じ型である。北の方は緑丸に硯や紙を結いつけて百合若に送ったが、途中で墜死する。オデュッセウスの場合、彼が乞食の姿で帰宅したとき誰も気が付かなかったが、愛犬アルゴスのみが主人を認め喜びののち息絶える。北の方は別府の意に従わなかったので池に沈められることになったが門脇の翁の娘が身代わりに立つ。ギリシアでは、オデュッセウスによって求婚者らの愛人であるペネロペーの召し使いが絞殺される。百合若は苔丸と名づけられて別府に使われていたが、新年の弓始めのとき鉄の弓を引いて兄の別府の舌を抜き弟を壱岐に流す。

金関丈夫は『木馬と石牛』（法政大学出版局、1982年）の中で以下のように論じている。坪内逍遙は明治39年（1906）これら2つの物語の間に著しい類似が存在するのは、ギリシアの物語が輸入されて「百合若大臣」が成立したからだとした。室町時代に成立した幸若舞の中にこの物語が見られるが、その曲の上演の初出記録である『言継卿記』は天文20年（1551）である。その時代までにオデュッセウスの物語が伝来しこれだけの物語に仕上がったことを示す史料がない。金関は「百合若大臣」が成立する前に伊予河野氏の家乗『予章記』や漢訳仏典『賢愚経』『報恩経』の中にいくつかの類似のモチーフがあることを指摘した。金関はさらに、インドの古典『マハーバータ』第3巻所収の「ナラ王物語」（鎧淳訳『ナラ王物語』岩波文庫、1989年）にいくつかの類似したモチーフがあり、『ラーマヤナ』にも強弓のモチーフがあると述べている。坪内も論じたように「応神紀」にも1部のモチーフは見られるし、神武天皇東征譚の中にも百合若のモチーフは見られる。百合若のモチーフは中国の京劇の「彩楼記」その他にも見られる（40-58頁）。

オデュッセウスの百合若の帰還物語の中に含まれるモチーフとその連続は、これら2つの物語にだけ共通したもので、内外の古典から引き出されたモチーフは個々の断片であって連続の中にあるものではない。天文20年（1551）正月5日、山科言継邸で幸若の「ゆり若」が演じられたが、ポルトガル人が大隅国種子島に漂着したのは天文12年8月である。この間わずか7年余りにすぎない。この間に、ポルトガル人が伝えたオデュッセウスの物語

が百合若大臣の物語にまで消化されて舞曲にまで採り入れられたと考えるのは何としてもムリな感じである、と金関はいう（前掲書、45頁）。

坪内や同じ結論に達した米人E.L.ヒッバード同志社女子大学教授（同、40頁）に私は惹かれる。両物語の個々のモチーフは16世紀以前に広くアジア・ヨーロッパ・アフリカさらには新大陸に分布していたことは経験的に分かる。これら断片的モチーフが連続して複合的で一連の話の筋を形成しているのは、オデュッセウスの物語と百合若大臣の物語しかない。津田左右吉は百合若大臣の物語に見える別府兄弟の裏切りと愛鳥の文使いの件がオデュッセウスの物語に欠けていることを挙げて坪内説を反駁している（同、45頁）。しかし、別府兄弟の裏切りはオデュッセウスの旧友らがペネロペーに求婚することと対応するし愛鳥の文使いはオデュッセウスの足の古傷から昔仕えた主人であることを知った乳母に対応する。このことは妻のペネロペーにも口外することを禁じられていた。足の古傷によって幼いときに川に捨てたわが子であると知った三蔵法師玄奘の母の伝説が『西遊記』にある。金関は鳥の文使いのモチーフは神武天皇伝に出てくるとする（同、43-4頁、他）。本来は足の古傷のモチーフが用いられていたのが、鳥の使者のモチーフによって換骨されたのであろう。

前述した偽ホメロス作の「蛙鼠合戦」物語と江戸時代初期に成立した「かくれ里」の中で用いられたモチーフの連続も西洋人によって持ち込まれた話が日本風に組み立てられたものである。ホメロスあるいは偽ホメロスのギリシアの文学ではないが、『旧約聖書』『創世記』にあるイスラエルの民の祖アブラハムの孫でユダヤ人の祖となったヤコブの伝説と日本神話の天照大神の孫ニギノミコトの天孫降臨神話の間に著しい類似があることを私は『夢の神話学』（法政大学出版局、1997年）の中で詳述した。この神話・伝説は近世の伝来ではなく、8世紀初頭には既に完成された形で『記・紀』の中で見られる。ヤコブの子ヨセフは美男で女性が恋い慕った。ヨセフ伝説は大国主神とスサノヲノミコトが活躍する出雲神話の中に類同するモチーフの連続が見られることも前掲書で詳述した。

ヤコブ神話は北部九州で日本神話に結実し、ヨセフ神話は出雲で結実した。諏訪大社は出雲系の神を祭る大社で、その末社は全国で1万数千社を数える。出雲神話圏はヨセフ神話圏が日本に伝来したもので、新羅から日本海を渡ってやってきたと考えられる。ヤコブ神話圏も新羅にあったが、北部九州に伝来し天孫降臨神話を結実した。ヤコブ神話・伝説とヨセフ神話・伝説の移動は、それを信奉する民族と共に中央アジアを通して新羅に達し、そこから日本に到着した。ヨセフ伝説はモンゴルの伝承の中にも残っていることは前掲書で述べておいた。神話・伝説の伝播には水面に生ずる波動のように、水は移動することなくただ波だけが移動する場合と、波だけではなく水そのものが流れてゆく場合がある。この場合、水は伝達物の乗り物となる。

諏訪大社の元日の神事に蛙狩之神事がある。この源流については私の説を述べておいた。同じ蛙神事が伊勢神宮にもあることを私は指摘しておいた。二見浦の夫婦岩を拝む岩場に参拝者は近くの土産店で蛙の焼き物を買って夫婦岩を遥拝して帰る。この習慣は元日に限らないが、参拝者は蛙を供えることにより天照大神の活性化を願ったのが始原の姿であった。ヨーロッパの巡礼者たちが巡礼地の寺院に蛙の絵馬を奉納するのは、寺院の神や聖者の活性化を願い、自らはその恩寵に与ろうとした行為であった。蛙の多産にあやかって家族の繁栄を祈願したり、農作物や家畜の豊作を願ったのは始原の姿ではなかった。このような蛙供犠をともなった複合はヤコブ伝説圏にもヨセフ伝説圏にも古くから付随したものであったと考えられる。「出エジプト記」には、モーセの兄アロンがナイル川に無数の蛙を出現させファラオを困らせた話が見られる。これらの蛙はアロンの神の化身で、アロンは神の力でファラオを苦しめたのであった。

エジプトのヘルモポリスでも蛙はヘクト神として神格化された。ローマ時代、テオドシウス大帝によって380年にキリスト教が国教に定められるまで、ローマではキリスト教のほかに紀元前からエジプトから移入したイシス・オシリス神崇拜とイラン起源のミトラス教が並行して信仰された。キリスト教の中にイランのゾロアスター教の天神アフラ・アズダーと女神アナーヒター

の子ミトラの信仰とイシス・オシリス信仰の影響が多く見られることは以前に述べたことがある。ローマからキリスト教が逆移入されてエジプトにコプト（ギリシア語アイギュプトスから）教会が成立し、エチオピアにも広まった。ローマ教会の灯明の油壺は蛙型である。コプト教会のそれも同じである。コプト美術には古代エジプトの伝統とローマ教会やペルシア美術の影響が見られるので、神の火、神の聖霊を象徴する灯明に現代の人間には不可解な動物である蛙が用いられたのは何ら不思議なことではない。蛙の絵馬にも同じような伝統があったと考えられる。季節の変わり目の真っ暗闇の中で蛙の灯明に火が灯されるのは神の再生を意味した。無数の蛙の灯明は、神の復活と同時に再生する祖霊の火でもありそれを灯す参詣者の再生の火でもあった。

蛙は祖先であり神であった。朝鮮の高句麗（高氏のクライ）の始祖神話に関連して蛙が現れる。金富軾『三国史記』（金思燁訳、上、下、1980年、1981年、六興出版）と一然『三国遺事』（金思燁訳、1976年、朝日新聞社、同、1981年、六興出版）の両書に多少の精粗の出入りがあるが、以下のような伝承が述べられる。北扶余の王、解夫妻は天帝の子孫がこの国に建国するという大臣の夢の告げを聞き、王都を東に移して国号を東扶余とした。夫妻は年老いても子がなかった。ある日、鯉淵にさしかかると乗っている馬が大きな石の前で涙を流した。不思議に思って石をひっくり帰すと、そこに金色の蛙の形をした子供がいた。王は子供を^{きんあ}金蛙と名付けて太子とした。夫妻が亡くなったあと金蛙が王となった。金蛙のあと帶素が跡を継いで王となったが、高句麗第3代の大武神王に殺され国も滅んだ。

金蛙は太伯山（白頭山）の南を流れる川で1人の女に出会った。女は川の神の娘で柳花といった。ある日、天帝の子で解慕漱という男が彼女を鴨緑江のほとりの家に誘い込み、密かに通じて出てゆき戻ってこなかった。彼女の両親は彼女を責めたのでこの川に流れてきたのであった。金蛙は不思議に思い彼女を部屋の中に閉じ込めておいたところ、日光が彼女を照らした。彼女が身を避けると日光が追ってきて照らした。それで孕り1個の卵を生んだ。大きさが5升もあった。金蛙が捨てて犬や豚に与えたが食べようとしない。

道に捨てると牛や馬が避けて通り、野原に捨てると鳥や獣が卵を覆ってやった。王は母に返してやった。やがて１人の子供が殻を破って生まれ弓の名手となり朱蒙と名付けられた。金蛙の子、素素らは朱蒙を亡きものにしようと謀ったが朱蒙の母がこれを察して朱蒙に告げたので彼は魚とスッポンがつくった橋を渡って逃走した。渡り終えると橋は崩壊したので追手は渡れなかった。朱蒙は卒本を都と定めて高句麗を建国した（『三国史記』上、281-3頁、『三国遺事』67-70頁）。

東扶余の王、解夫婁は、金思燁によると天帝の子、解慕漱の子で、高句麗の始祖朱蒙とは兄弟の関係にあった（『三国遺事』68頁、注１）。北扶余、東扶余、高句麗はいずれも天帝の子である解慕漱から出たものである。柳花は朱蒙の母であり解慕漱の妻であった。解夫婁は解慕漱の子であるが母は不明である。しかし柳花を室に幽閉して卵を生ませ、それが朱蒙になったとあるので、夫婁は朱蒙の父であった可能性がある。柳花は解慕漱の妻の立場でもある。東扶余王解夫婁が石の下に金蛙を見出し嗣子とするが、論理的には妻が天帝の種を宿して生んだ子である。しかし夫婁は年老いても子種がなかったので解慕漱の子であったと考えられる。慕漱の妻柳花は川の神の娘で、魚やスッポンに助けられた朱蒙や金蛙は柳花の子であった。この２人と解夫婁は天帝の孫つまり天孫であった。３人の天孫は北扶余と東扶余と高句麗の始祖となった。

北扶余の始祖は解慕漱で東扶余の始祖はその子解夫婁であった。人間である夫婁にはトーテムである蛙の姿をした金蛙がいた。そこで東扶余の始祖は解夫婁であり金蛙でもあった。高句麗の始祖は朱蒙（東明）であった。一方、金蛙と柳花は母子神の関係にあり、柳花は幽閉されて朱蒙を生む。金蛙と朱蒙は親子の関係にあるのではなく互いに分身で、解夫婁、朱蒙、金蛙は解慕漱の子であった。同じように人間である朱蒙にはトーテムである蛙の姿をした金蛙がいた。朱蒙も解夫婁も石から生まれその姿は蛙のようであった。

前述したように、『今昔物語集』巻第28、第41によると近衛門の内に大ガマが１匹棲んでいて夕方になると出てきて平らな石のようになる。これを踏

んでつまずき倒れない人はない、という。近衛門は平安宮の大内裏の四周にあった12門の1つで東がわの中央にあった門である。近衛門が内裏にいちばん近い位置にあった。天子と外界、聖と俗の境界として近衛門がもっとも重要な場所であった。門には高さ20センチ、幅20センチほどのケヤキの敷居が設けてあった。夜間に門扉を閉めるとき敷居の中央近くに空けたほぞ穴に一方の扉の猿を落としもう一方の扉を合わせて閉め^{かんめぎ}門を通した。敷居は聖俗の境界であるので神聖視され土足あるいは裸足で踏むことをはばかった。敷居は古今東西の文化では祭壇とされたのでそれを裸足で踏むことは供犠されることと同じ効果があった。踏む者の体内の活力が吸い取られ、異界に移ると考えられた。祭壇である敷居の横木の前に平たい石が埋めてある。4 - 5センチほど平面が地上に出ているので夕暮れに門に入る者はつまずくことがあったであろう。何らかの理由で、この祭壇に蛙が供犠されたので祭壇石は蛙石と呼ばれるようになったのであろう。蛙石は諏訪大社上社の禁足地にある蛙石と同じものである。伊勢二見浦の夫婦岩を望む海岸の岩場の上に近くの店で求めた蛙の焼き物を入びとが置いてゆくが、これも前述したように伊勢神宮複合の一端で天照大神の他我であろう。伊勢神宮の東がわ伊勢湾に面して蛙の祭壇は位置した。近衛門（陽明門）の敷居の場所に大きな蛙石があったが、門は大内裏の東がわ中央に位置した。蛙の祭壇が太陽が昇る方角ともつながっていたことが分かる。

諏訪大社上社の蛙石には雨乞いの祈願が行われた。蛙と雨の関連は普遍的なものなので多くの事例がある。太陽神である天照大神は穀霊でもあるので蛙が五十鈴川の河口に祭られるのは自然の成りゆきであった。信州千曲川に夜釣りに行った人が川の水から顔を出した3人が乗れる岩に釣りを垂れていたところ、その岩に手鞠ほどの光るもの2つが並んで出てきた。よく見るとそれは岩ではなく巨大なガマガエルで光ったものはその目であった。男は生きた心地もなく一切を打ち捨てて逃げ帰ったという（鈴木牧之編撰、京山人百樹刪定、岡田武松校『北越雪譜』岩波文庫、1936年、同特装版、1982年、153-4頁）。ここでは釣り場の巨岩と大蛙が一体化した蛙石が見られる。鈴木

牧之の記述ではこの蛙石は雨乞いの対象ではなさそうであるが、千曲川沿いの住民の間では古くから蛙石とされていたのでこのような話のできたのである。流域が旱魃に見舞われて川の水量が減ると蛙石が大きく川面に姿を現したであろう。信仰の対象とされる巨大蛙はその腹の中に水を吸い上げてしまったので、蛙を打ったり蛙の腹を裂いて水を得ようとしたであろう。蛙は旱天にそなえて腹の中に多量の水を貯える習慣があるからである。イソップが伝える寓話は水辺での蛙の殺害に発したものかも知れない。牛が水を飲んでいてヒキガエルの赤ん坊を踏み潰してしまった。兄たちは母親に妹が馬鹿でかい奴の蹄の下敷きになって潰されたと言った。母親は自分の体を膨らませながら、その動物はこんなにも大きかったかと尋ねた。子供たちは、それ以上膨らませないで、あいつの大きさに近づく前に途中で破裂するよ、といった（『イソップ寓話集』277-8頁）。ギリシアでは蛙を潰して雨乞いをしたと考えられる。

イソップの蛙と牛の寓話は古代の請雨儀礼の名残りであった。古代インドの聖典である『リグ・ヴェーダ』（7・103）に蛙の歌が収録されている。インドやアフリカでは長い熱暑の間、蛙は乾いた皮袋の中に水分をたくわえ、沼や泥土の中に身を横たえる。雨季の到来と共に雨がその皮袋を濡らすと、仔牛をもつ牝牛の鳴き声のような蛙の鳴き声が一斉に挙がる。2匹の蛙が互いに唱和して鳴く。1つは斑で他は緑である。2匹は名を同じくするが姿は異なる。1つは牛の鳴き声をたて他は山羊の鳴き声を立てる。新年のソーマ祭を行う祭官が満杯のソーマ桶の周りで唱和するように、蛙らは雨季の到来を告げる新年に鳴き声を挙げる（『リグ・ヴェーダ讃歌』辻直四郎訳、岩波文庫、1970年、325-6頁）。インドでは蛙は新年に祭られた。雨季の到来と共に最初期の祖先が訪問してきたと考えられる。2匹の蛙を祭ったが、諏訪大社の元旦の蛙狩之神事も2匹の蛙を祭るので同じようなトーテムの祭りがあったことが分かる。さらに牛と山羊が出てくるが、これも古代インド人のトーテムであった。テレビで知った話であるが、司会者がアフリカ人にお国の赤ちゃんはどんな泣き声を挙げるかと質問したところ、日本ふうなメーメー

とかモーモーと泣くと答えていた。司会者はそれは山羊や牛の鳴き声だといっていた。ケニアでは赤ん坊の誕生はトーテムが赤ん坊の姿を取って生まれ、トーテムの鳴き声を挙げるのかも知れない。アフリカでは誕生の場に大蛇や鰐を連れてくるという民族誌もあるので赤ん坊によってその泣き声はちがうのであろう。

世界には腹を膨らませた蛙が雨乞いの対象とされたり大洪水の原因とされたりするものが多い。イロクオイ・インディアンの神話によると、原初の水は大蛙の腹に貯えられていた。文化英雄イオスケハが蛙を刺して河川と湖を創造した。オーストラリア原住民の伝説によると、大洪水は湖の水を呑み込んだ蛙の腹が破裂した結果起こった。オリノコ・インディアンは蛙を壺の中に入れ、旱天のとき棒でつついて雨乞いをする。ネパールのネワール族は10月7日に蛙池で蛙祭りを行い、供物を捧げて雨乞いする。ネパールでは10月の蛙祭りは9月5日の竜祭りと一連の祭りとされる(J.ヘイスティングズ『宗教・倫理百科辞典』第1巻, エディンバラ, 1908年, 516-7頁, 同, 第9巻, 1917年, 322頁, J.G.フレイザー『金枝篇』第1巻(『魔術と王権の発展』第1部), ロンドン, 1911年, 292-5頁)。

奈良県明日香村川原と野口の字界に有名な亀石がある。亀石は現在は南西を向いているが、西の当麻の方を向くと洪水が起こるという伝説がある。亀石は東がわにある川原寺の寺域の境界石であるという説がある。野口という地名は、京都の嵯峨野、紫野、鳥辺野に見られるような坂(阪)ほど急ではないが、緩い傾斜地である野に由来する。野が坂につづき山頂に達した。野口というのは山口、坂口と同じように山の入り口に付けた地名であった。亀石は飛鳥川と高取川の間の野口に位置するので、飛鳥宮跡や飛鳥寺一帯が洪水で水浸しになっても水を被ることはない。『万葉集』第19に「大君は神にし坐せば水鳥の多集く水沼を都となしつ」という天武天皇を詠った読み人知らずの歌がある(4261)。

亀石が向いている南西には天武天皇・持統天皇合葬陵が野口から上った丘陵にある。亀石は東の川原寺や橘寺と一体のものではなく、天武天皇・持統

天皇合葬陵と一体になるものである。伊勢神宮と二見浦の蛙，上来述べてきた宮殿入り口の蛙石と同類のものである。明日香村野口にある有名な亀石は蛙石と考えたほうがよさそうである。蛙は皇祖でもあるので，天武天皇・持統天皇合葬陵を守護しているのである。東北 - 南西（艮 - 坤）の軸線は西北 - 南東（乾 - 巽）の軸線と共に祖先祭祀の方位であった。天武天皇・持統天皇合葬陵の南下方から巨大な石を並べた遺構が見つかった。西北から南東に延びる石列で大きいものは３メートル×２メートルある。大きい石は南西に面を持つように並べてある。約１５メートルの長さにわたって検出されている。前後に相当長く石列がつづいているようである。この石列は西北 - 南東の軸線上にあり，石の面は蛙石と同じように南西を向く（河上邦彦，占部行弘『古代大和の石造物』橿原考古学研究所編，２００１年，８４-５，８９頁，河上邦彦『飛鳥を掘る』講談社選書メチエ，２００３年，２３-６頁）。

前掲２書からは多くの情報をいただき，行文中に自分の解釈も入れた。ところで蛙石の裾を取り巻いて溝が掘られてある。蛙が天武天皇の宮から洪水を吸い上げるための水路を表わしたものである。蛙石の巨大な胴に水が貯められ，旱天のときは水路を通じて飛鳥川と高取川に水が戻されたと考えられる。蛙の口の両端でこの溝が終わっている。別の見方をすれば巨石は大地のへそ（子宮）で，ここから祖先（神の子）が生まれるという扶余・高句麗的さらにはその伝統を継いだ新羅的な考えである。壬申の乱後，天武天皇は湿地帯に浄御原宮を造営した。湿気抜き工の工法は渡来人によって行われたであろう。彫刻の技術は時代はちがうが酒船石遺跡の石工技術と通じるもので，猿石や道祖神石や須弥山石を彫った石工の技術とは別のものである。蛙石の下部には矢（くさび）の痕でつくられた格子文がある。周囲の岩肌から考えるとさらに大きい岩塊から採取されたものではない。同じ格子文（網目文）は益田岩船の下部にも見られる。こちらはかなり広い面にわたって彫られており，こちらも採石の際についた矢の痕ではなく呪術的な格子文である。網目文についてはかつて論じたことがある。物体あるいは（新婚夫婦や死体のような）人物に網を被せるのはそこから魂を遊離させないための呪術である。

天武天皇・持統天皇合葬陵は東北に蛙石を設けた。

大和岩雄『天武天皇論』(二, 大和書房, 1987年)によると, 天武天皇は火徳の帝で, 壬申の乱では軍衣に赤色の印をつけ赤旗をなびかせたと『記・紀』『万葉集』にある。天武天皇は自らを漢の高祖に擬していたからである(420頁)。前述したように功臣蕭何は終生高祖に仕え漢室の興隆に尽くした。高祖は軍鼓, 軍旗に血を塗り幟の色を赤くした。高祖廟に祀る蕭何の姿は蛙である。蕭何は高祖の父祖赤帝の化身とされるようになり, 高祖のトーテムの姿で表わされるようになったのであろう。高祖の守護神としてその廟には欠かすことができないものとなった。天武天皇・持統天皇合葬陵の東北に据えられた蛙石は天皇の化身であり, 天皇の守護神であった。それは太陽神で, 伊勢神宮の東方にある二見浦の岩場に祭る蛙と同じ職能を持っていた。合葬陵造営以前に天皇の遺志があったのかも知れない。

(つづく)

Traditional Cult of Frogs and Toads

Eiichi IMOTO

On New Year's Day Suwa-taisha Shrine has a ritual to make sacrifice of two frogs.

Visitors to the Dual Shrines of Ise, Naiku Shrine and Geku Shrine, offer frogs of pottery on the rocky altar by the sea.

Pilgrims to Santiago di Compostella have offered votive picture tablets of frog to the temple.

Witches would give a dinner party at the night of Walpurgis on the mount Brocken at the beginning of May day. Frogs were main dish then. Witches were goddesses of pre-Christian period.

Suwa-taisha's sacred pole with strips of white papers on top, Ise shrine's center pole with various color strips on top, and May pole with various color strips down from top are totem poles. Frogs were representation of ancestors or gods. Frog-shaped lamps of Roman, Coptic or Ethiopic Church were souls of ancestors or gods. Gods or goddesses ate the offering of frogs at the beginning of the year to make themselves resurrect.

